

岡山大学

文明動態学研究所

OKAYAMA UNIVERSITY
RESEARCH INSTITUTE FOR THE DYNAMICS OF CIVILIZATIONS



OKAYAMA
UNIVERSITY

世界への扉を開く



2026年度 研究所案内

所長からのメッセージ



新型コロナウイルスによるパンデミックの発生や繰り返される戦争により、私たちの生存は深刻な危機を迎えています。この世界的な危機を乗り越えるために、感染予防やワクチン開発等についての理化学的な研究が進められていますが、社会関係や価値観、文化的慣習や経済など、人文科学的な側面も感染症の動向に深くかかわっていることが実感されつつあります。

人類の誕生からおよそ1万年前までの長い間、小規模な集団で分散して生活していた人類にとって、パンデミックは起こりませんでした。感染症が人類にとって大きな脅威となるのは、農耕や牧畜が始まり、人口が増え、都市や国が形成され、数万人から数十万人という規模での集住生活が始まってからのことです。農耕や牧畜による自然の人工化、技術の発達、新しい世界観や価値観の創造という人類特有の現象 (=文明)は、人類に繁栄をもたらしましたが、同時に戦争、環境破壊、差別、貧困などの多くの問題が生まれました。

現代社会が抱えるさまざまな課題は、長い歴史の中でヒト、社会、技術、環境が相互に密接に関連しあって発生してきたものです。今の状況だけ、個別の要因だけを見ているだけでは根本的な解決につながる長期的な展望を見出すことは難しいでしょう。文明動態学研究所は、人文社会科学における関連分野の連携および自然科学分野との連携による学際的研究体制を構築し、分野限定的研究では見えてこない人類史の実態を明らかにすることをめざします。

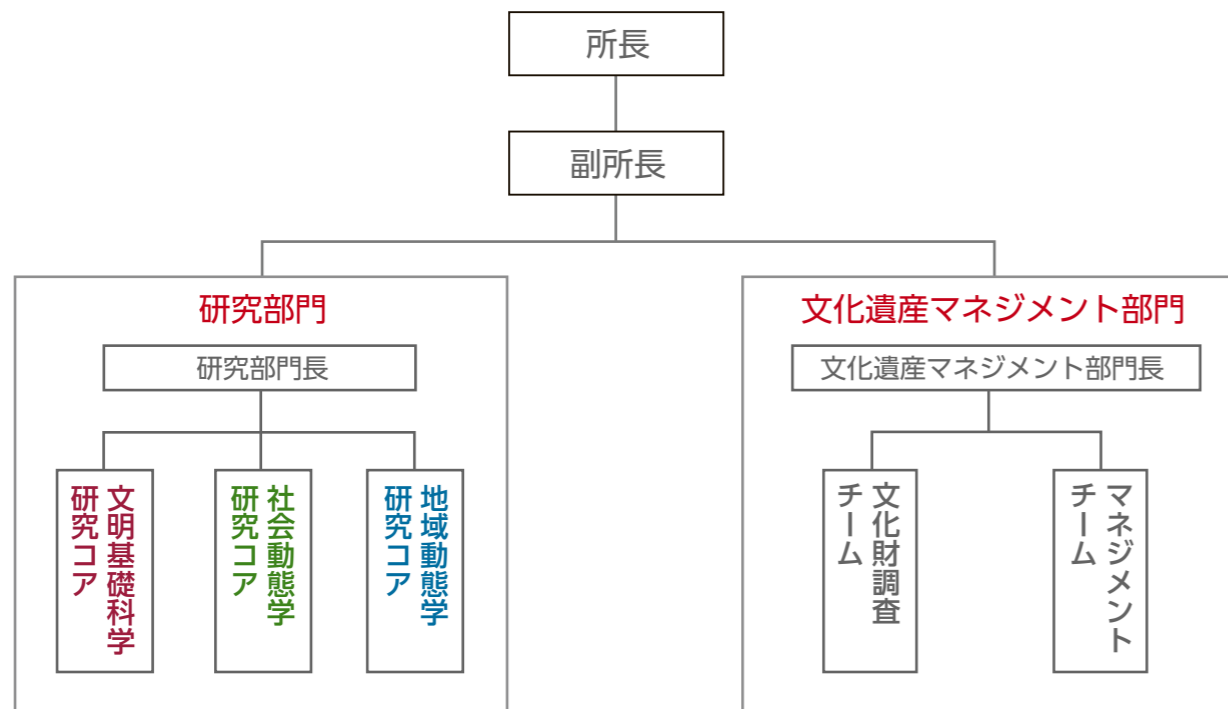
岡山大学 文明動態学研究所
所長 今津勝紀

ミッション

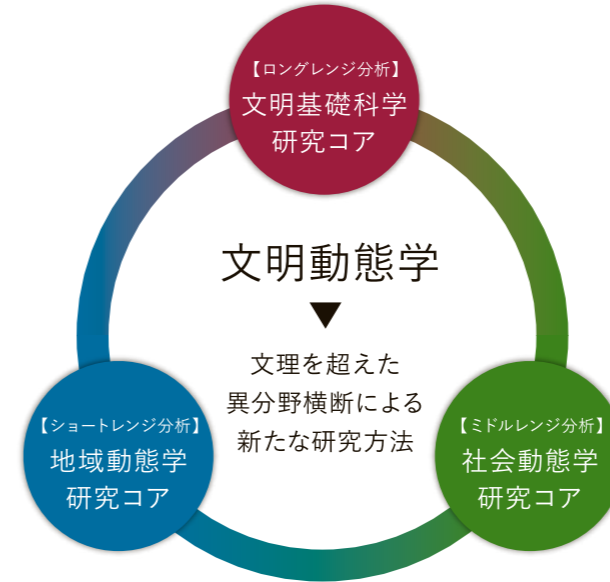
分野・地域・時代を結び
人文・社会科学研究の新しい未来へ

現代社会が抱える様々な問題を人類の文明の消長という大きな枠組みのなかでみつめ直し、過去の探求と地域への着目から得られた新たな知によって、持続可能な社会の構築に貢献する新学問、文明動態学を創造します。

組織図



研究部門



【ロングレンジ分析】 文明基礎科学研究コア 人類の誕生と文明の形成	国境を越えた人類史学としての考古学 人類と環境 地域形成の歴史的理解
【ミドルレンジ分析】 社会動態学研究コア 社会の複雑化と地域社会の形成	生存のシステムとしての家族・地域・国家 災害と地域社会のレジリエンス 社会変容とジェンダー
【ショートレンジ分析】 地域動態学研究コア 日本社会の縮図としての瀬戸内	地域社会の持続性と市場、制度 生活文化の連続・非連続 アートが拓く地域の未来

種々の研究プロジェクトを通じ、学内外の研究者等が有機的に関わり、国際的なネットワークを形成することで、人文科学、社会科学を中心とした文理横断型研究拠点を確立。

岡山大学学術研究院社会文化科学学域と密接に連携し、新たな知の創造と社会の還元にとりくむ人材や地域社会と国際社会で活躍できる人材を育成。

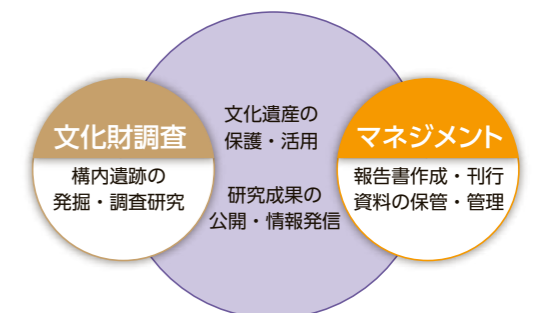
文化遺産マネジメント部門

■概要 要/岡山大学埋蔵文化財調査研究センターを前身とする本部門では、岡山大学の文化遺産の調査・保護・研究・活用を行い、なかでも本学敷地内埋蔵文化財について発掘調査・研究および出土資料等の管理を行います。調査・研究のみならず、その成果をひろく社会に情報発信し、活用していきます。

■沿革 岡山大学内における埋蔵文化財調査は、岡山市教育委員会が1978年に鹿田地区で行った立会調査に始まります。県や市による立会・試掘調査は1982年まで続けられました。本学における遺跡保護体制の整備は同年から本格化し、本学の円滑な施設整備の推進とともに本学の埋蔵文化財の保護を図るため、翌1983年に岡山大学埋蔵文化財調査室が設置され、1987年11月には埋蔵文化財調査研究センターに改組されました。同センターは業務として学内の埋蔵文化財調査研究にあたり、その成果を発掘調査報告書として刊行し、出土資料の管理を実施してきました。また定期的にキャンパス発掘成果展や特別展として、調査成果の展示公開を行ってきました。2022年4月に文明動態学研究所と統合し、これまで同様に埋蔵文化財に関する業務を継続するとともに、研究所の理念にのっとり、研究の一層の深化をめざします。

■組織構成/本部門は、文明動態学研究所教授会の具体的審議に沿って運営します。また、構内遺跡調査は全学的業務と位置付けられており、埋蔵文化財調査委員会の指導の下、調査・研究にあたります。本部門では、部門長(教授)、チームリーダー(准教授)、および4名の教員と技術補佐員5名が業務にあたっています。文化財調査チーム、マネジメントチームの2つのチームは主たる担当を分けていますが、連携して本学の文化遺産の保護・活用を図り、研究成果のさまざまな発信、公開に取り組みます。

文化遺産マネジメント部門の
2つのチーム



ロングレンジ分析

文明基礎科学研究コア

人類の誕生と文明の形成

国境を越えた人類史学としての考古学

人類と環境

地域形成の歴史的理解



テオティワカンでのドローン計測風景

- 鈴木真太郎[生物考古学・マヤ考古学]
- 飯塚義之[岩石学]
- 石井 匠[芸術考古学]
- 植村玄輝[哲学史・現代哲学]
- 四角隆二[西アジア考古学]
- 杉山三郎[新大陸考古学・人類学]
- 杉山奈和[メソアメリカ考古学・動物考古学]
- 清家草[日本考古学]
- 太郎良真妃[3D考古学・情報考古学]
- 千葉裕太[メソアメリカ考古学]
- 塚本憲一郎[メソアメリカ考古学]
- 濱田竜彦[日本考古学]
- 前田仁暉[考古学]
- 松本直子[認知考古学・ジェンダー考古学]
- 村上智見[中央アジア考古学・染織]
- ライアン ジョセフ[日本考古学・東アジア考古学]

本研究コアは、長期的なスケールで文明の誕生と動態を見据え、文明を生み出す人の特異性や文明の盛衰に関わる諸要因を明らかにすることをめざします。人類にとって大きなターニング・ポイントである農耕がどのように始まったのか、周期的な気候変動に対して、人類がどのように対応してきたかなど、これからどのように持続可能な社会を作っていくかを考える際の手がかりとなる、普遍性の高いテーマを追求します。

この目標を達成するため、分野横断的な研究を推進することが本研究コアの特徴です。X線CTやミュオンを使った非破壊分析や生物考古学的研究をはじめ、地球科学、化学、植物学、生物学、遺伝学、物理学などの学内および他

機関の研究者と連携した文理横断的な研究により、考古資料から社会や環境に関する情報を得るための新しい研究方法の開発や、シミュレーションや地理情報システム（GIS）を用いた分析やモデル化を進めます。

瀬戸内地域に加えて、メキシコやグアテマラなどメソアメリカ地域も本研究コアの重要なフィールドです。多様な環境で展開した文明動態の国際的な研究によって、地域がかたちづくられる歴史的な過程や、文明を生み出す人間の本源的な性質、文化や社会の多様性が生まれるメカニズムを解明し、人間とは何か、という人文学の究極的な問いに迫ります。

ミドルレンジ分析

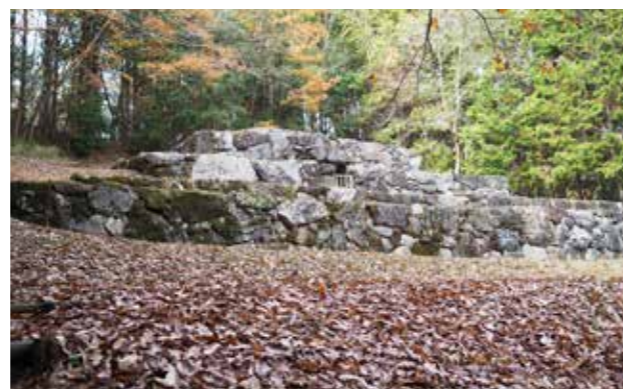
社会動態学研究コア

社会の複雑化と地域社会の形成

生存のシステムとしての家族・地域・国家

災害と地域社会のレジリエンス

社会変容とジェンダー



岡山県真庭市（旧備中国英賀郡）の大谷一号墳

- 今津勝紀[日本古代史]
- 岩崎志保[日本考古学・中国考古学]
- 大久保範子[日本美術史・浮世絵]
- 大澤誠 [文化人類学]
- 川本直美[文化人類学]
- 沢山美果子[日本女性史]
- 柴田亮[中世考古学]
- 佃麻美[文化人類学]
- 徳永響子[日本中世史]
- 野崎貴博[日本考古学]
- 濱谷真理子[文化人類学、南アジア地域研究]
- 東野将伸[日本近世史]
- 光本順[考古学・博物館学]
- 村上菜菜[日本古代史]
- 室山京子[日本近世史]

地球上に拡散した人類は、それぞれの地に適応し、独自の文化を形成してきましたが、その過程で社会システムはより複雑化しました。現代の人類が直面し、解決を要する多くの問題が前景化する中で、その淵源をみつけ、さまざまな問題の形成・変容のプロセスを解明することは重要な意味を持つでしょう。

本研究コアでは、中期的なスケールの時間軸と異なる言語・文化への広がりを含む空間軸を組み合わせ、有史以来の人類の歴史と社会を対象に、家族・地域・国家および宗教、社会階層やジェンダー、集団間関係など、社会的なシステムや人間関係が環境変化や人口変動などと絡みあいながら変化する様態に光を当てます。

人と人、人と自然の関係性を再考しつつ、多様性のある

持続可能な社会をいかに実現していくかという課題を掲げ、従来の価値観に沿って引かれた境界線をさまざまに引き直しながら、過去から現在への軌跡を可視化し共有することの意義と必要性を具体的に示します。

進行中の研究プロジェクトは、地域歴史資料アーカイブの構築やICT技術による文化資源の社会化、考古学的基礎研究など多岐にわたりますが、いずれも学際的な視点を重視しつつ進められています。多彩な分野の研究者の協働による異分野融合の可能性を追求するほか、人類総体を視野に入れた人間の生存と生活に即した社会動態の解明を目的として、国際共同研究を進めます。

ショートレンジ分析

地域動態学研究コア

日本社会の縮図としての瀬戸内

地域社会の持続性と市場、制度

生活文化の連続・非連続

アートが拓く地域の未来



広島県尾道市の百島より 写真 / 才土真司

- 津守貴之[世界経済論、グローバル・ロジスティクス論]
- 岩淵泰[地方政治・市民参画・まちづくり]
- 北川博史[都市地理学・産業地理学]
- 佐藤淳平[東アジア経済史]
- 田代潤貴[行政法]
- 天王寺谷達将[会計学]
- 西田陽介[経営戦略(企業、非営利組織)]
- 福重さと子[行政法・公物法]
- 松岡弘之[日本近現代史]

地域動態学研究コアは、研究対象期間を広義の「現代」＝過去 200 年以内の時期としています。この時期は 1980 年代までは「国民」、「国民国家」の創出・形成が、それ以降はこれらがグローバル化の進展によって溶解・解体する、あるいはその反作用としてナショナリズムが「硬化」するという現象が見られます。とりわけ 1980 年代以降はグローバル化が急激に進展しています。グローバル化とはヒト、モノ、マネー、情報の空間的な移動性が大きく向上する現象であり、それは空間的に見るならば、インターローカル化＝国境を越えた都市・地域間ネットワークを形成させるものです。したがって、「現在」の特徴であるグローバル化を考察するには地域社会とインターローカル・ネットワークのあり方を分析

する必要があります。

インターローカル・ネットワークは市場を通じて形成され、市場はそれを支える制度によって機能します。制度は各地域独自の文化を土台として形成されてきました。一方でグローバル化は各地域がそれぞれに育んできた制度・文化・技術の変容・融合をもたらしてもいます。そしてこれらの変化や秩序の中で活動し、また秩序を形成・持続し、変化をもたらしているのは企業や個人、行政体等の各主体です。本研究コアでは移動性の変化による「国民」の創出・形成・溶解・解体・硬化のメカニズムとそこにおける地域社会の役割・あり方を市場、制度、文化、技術および主体等の諸側面から総合的・多面的に分析します。

古代マヤ文明の考古人骨研究

現在のメキシコ南東部から中央アメリカ諸国にかけて古代マヤ文明が栄えました。紀元前 1500 年頃にその萌芽が認められ、16 世紀初頭にスペインに征服されるまで、旧大陸の諸文明から干渉を受けることなく、独自の文化、歴史を築きました。以前は“世界史に残る謎”とも評され、“謎と神秘の古代文明”という側面が頻りにクローズアップされてきましたが、昨今では考古学を中心とした様々な研究が進み、『謎』は少しずつ科学的知見へと変貌を遂げています。

文明動態学研究所では、鈴木真太郎教授を中心に、古代マヤの、特に考古人骨の研究が進められています。発掘時の骨資料の詳細な配置状況から腐敗の過程、遺体の状況を復元するアーキオタナトロジー、死亡時年齢の推定や性別の判定だけではなく、故人の生活習慣などを追求する詳細な骨学鑑定、食性や出自の追跡を可能にする安定同位体の分析、さらには古 DNA の抽出 / 解析など、様々な分析を駆使し、古代文明をその双肩に担った古代人一人ひとりの素顔に迫る文理融合的な学際研究です。

主な共同研究

- アリゾナ大学（米国）と共同で、マヤ文明最古級の巨大祭祀施設で知られるアグアダ・フェニックス遺跡（メキシコ）出土人骨の研究を行いました。特に腐敗過程の復元や、基礎骨学鑑定を担当しています。
- パリ第一大学（フランス）と共同で、カンクエン遺跡（グアテマラ）出土人骨の研究を進めています。主に安定同位体分析による移民動態の研究を担当しており、ユカタン自治大学（メキシコ）、ハーバード大学（米国）と共同で古 DNA の抽出と解析も行っています。
- イェール大学（米国）と共同で、モンタナ遺跡（グアテマラ）出土人骨の総合的な研究を開始しています。

新たな発掘調査

『古代マヤ文明の基層形成と発展におけるヒトの移動に関するバイオアーキオロジーの研究』（日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究 (A)24H00102) によって、グアテマラ共和国の南部エスクイントラ県エル・レマンソ遺跡の発掘調査が進められています。研究例の少ないグアテマラ南海岸地方でも特に未調査の遺跡で、2024 年度の発掘だけで早くも比較的保存状態に優れた 9 個体の新たな埋葬が発見されています。文理の壁を超えてグアテマラ、米国、日本の研究者が集い、現地メディアから取材を受けるほどに注目を集めています。



新たに発見された若い女性の埋葬

文化財レスキュープロジェクト

岡山史料ネット及び全国の史料ネット、国立歴史民俗博物館・東北大学・神戸大学を核として人間文化研究機構が推進する「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」と連携し、2018 年の西日本豪雨で被災した資料の保全活動に取り組んでいます。

災害時に滅失することの多い地域歴史資料の保全と活用を通じて、地域文化を掘り起こし、新たな地域社会の創造に貢献したいと考えています。人々の生活とともにある未指定の文化財や地域の歴史遺産に関する地域歴史資料学、デジタル技術を利用した数値計算モデルの構築、理化学分析や保存科学など新たな人文学の方法をもとにして、洪水・地震・疫病・気象などの災害と人々の生活を地域に即してとらえ直す、新たな地域史研究の創出をめざしています。

また全国の「史料ネット」活動を展開する各大学と連携して、地域社会と住民意識・歴史意識の相互関係を理解し、多様で開かれたレジリエントな地域社会づくりに貢献できる人材を育成するための教育プログラムの開発にもつとめています。

1995 年の阪神淡路大震災を契機として、歴史研究者・文化財担当者・博物館関係者・市民が自主的に連携し、民間に伝わる未指定の文化財の救済と継承をめざす取り組み、「歴史資料ネットワーク」が生まれました。その後、列島各地で頻発する災害を目の当たりにして、同様の目的を掲げた団体が各地で生まれています。岡山史料ネットは、災害に見舞われる前から、予防的にネットワークを作ることを目的に、2005 年に日本最初の予防型ネットとして、岡山大学に事務局をおきスタートしました。文明動態学研究所も積極的にこの事業に取り組んでいます。



横下張り文書のレスキュー



被災資料の安定化作業

瀬戸内プロジェクト

過去 約 30 年間、フラグメンテーション（生産工程の細分化 とその国境を越えた分散配置）がグローバルな情報システムとロジスティクス・システムの形成・融合によって急速に展開しています。それは産業集積パターンを大きく変化させ、新興都市・地域のこれまでにない急激な成長・肥大化を促す一方で、かつて中心的な機能を集積させてきた都市・地域の衰退と中・低位の都市・地域の低迷をもたらしています。

そうした中、日本の地方圏では次のような事態が進行しています。まず生産年齢人口の減少です。これには人口が減少しても維持できる仕組みが必要となります。次にグローバル化による製造業の空洞化の進展です。そのため地域定着型産業の競争力強化とそれを起点とした新たな産業集積・産業連関の構築が必要です。三つ目に地域定着型産業の市場の縮小があります。これに対しては海外輸出等とこれらを通じた既存産業の儲かる新産業への再生が求められます。

このような状況を踏まえて本プロジェクトでは 2024 年 10 月に新たに「新産業化推進研究会」を立ち上げました。この研究会は既存の様々な産業の自立化と生産性向上の方法を検討・研究し、地域における新たな産業集積の構築に資することを目的とします。当面は地域定着型産業として農業と物流業を対象としたプロジェクトを実施します。具体的には桃やぶどう、日本酒等の輸出促進、農業における回遊型働き方改革プラットフォームの構築、遊休農地活用システムの構築等です。また地域社会の持続性の実態調査や中国地方防災物流ネットワークの構築、物流業の持続性確立のための人材確保・育成体制の整備も進めています。これらのプロジェクトを岡山大学内外の複数の組織（民間企業、行政体等）や仕組み（外部委員会、学会等）を繋いだ広範囲な産官学連携を実質化することで進めていきます。



シンガポール：PSA 本社から見たバシルバンジャン・コンテナ・ターミナル



ドバイ：下町から超高層ビルを眺める

岡山大学構内遺跡

岡山大学には津島キャンパスに津島岡大（つしまおかだい）遺跡、鹿田キャンパスに鹿田（しかた）遺跡、三朝キャンパスに福呂（ふくろ）遺跡が存在しています。

2025 年度までに津島岡大遺跡では 44 次、鹿田遺跡で 29 次、福呂遺跡で 2 次と、合計 75 次にわたる発掘調査を実施してきました。その成果は津島岡大遺跡関係で 24 冊、鹿田遺跡関係で 17 冊、福呂遺跡で 1 冊の報告書にまとめて刊行しています。2023 年から旧陸軍橋梁演習施設に対する学術調査を継続して行っています。

津島岡大遺跡

西日本では有数の縄文時代の集落と、弥生時代以降近世に至るまでの水田開発の歴史解明に意義を持つ遺跡です。さらに 1907 年に日本陸軍駐屯地として整備・利用されたことから、戦争遺跡としての性格も有しています。



陸軍橋梁施設調査の現地説明会

鹿田遺跡

弥生時代中期以降の集落の変遷、とりわけ古代・中世の集落構造を知るうえで重要な遺跡です。藤原摂関家殿下渡領（でんかわたりりょう）「鹿田庄」（かたのしょう）との関連が深くうかがえる遺構・遺物が出土することでも知られています。



第 24 回 キャンパス発掘成果展「鹿田庄のくらしと住まい」

津島岡大遺跡・鹿田遺跡は岡山平野の南北に位置し、両遺跡の調査研究が継続して実施されています。市街地にありながら、遺跡範囲の大半の調査が継続される例は大変貴重です。これにより該地の原始・古代を中心とする歴史と文化の多様性を明らかにしつつあります。また、ボーリング調査による地形環境の分析や、出土種子や木材等の分析、年代測定等、自然科学系の多分野と連携した文理横断的共同研究を推進しています。

福呂遺跡

1997 年に固体地球研究センター（現惑星物質研究所）施設建設に伴い新規に発見されました。約 8000 年前の縄文時代早期末から中世の遺構・遺物が見つかり、それまで空白であった三朝地区の歴史が明らかになりました。

2025年度 RIDC活動実績

<シンポジウム・講演会>

- 1月 第1回 岡山大学 文明動態学研究所 学術研究集会
「吉備の古代史を考える」
- 2月 第2回 大学と戦争遺跡カンファレンス
「一市民とのコラボレーション」
- 3月 高等先鋭研究院連携プロジェクト
「作物遺伝資源×考古学で拓く農と食の共創進化史」
研究ネットワーク構築ワークショップ

<公開講座>

- 10月 公開講座 第10回「こうもり塚古墳と五条野丸山古墳」
金田善敬 岡山県古代吉備文化財センター
清家 章 岡山大学社会文化科学学域 教授
- 2月 公開講座第12回「岡山の森林と木材利用史」
鐵慎太郎 倉敷市立自然史博物館
前田仁暉 文明動態学研究所 助教

<展示>

- 10月27日-11月1日 第24回 岡山大学キャンパス発掘成果展
「鹿田庄のくらしと住まい」

<RIDCマンスリー研究セミナー> オンライン開催

- 4月 「都道府県議会議員の実態を探る
—政策関心のヴァリエーションを可視化する—」
吐合大祐 高知県立大学 講師
- 5月 「断食の人類学—北インドと英国の断食食にみる
女性の生き方—」
濱谷真理子 文明動態学研究所 講師
- 6月 「古代メソアメリカ文明における環境変化と戦争」
市川彰 国立民族学博物館 准教授
- 7月 「ラクダの東伝」
菊地大樹 蘭州大学歴史文化学院 教授

- 9月 「国民政府による国家統合と財政」
佐藤淳平 岡山大学 社会文化科学学域 准教授
- 10月 「身体で語ること—18世紀フランスの言語改革—」
川野恵子 岡山大学 社会文化科学学域 准教授
- 11月 「後期銅石器～前期青銅器時代の中央アナトリア
—キュルテペ遺跡の発掘調査成果から—」
山口雄治 徳島大学大学院社会産業理工学研究所
(社会総合科学学域) 准教授
- 12月 「持続可能な開発を問い直す—「希望」の行方を
めぐって—」
柴川弘子 岡山大学教育学域 助教
- 1月 「環境価値の創造と数値—会計による価値創造マネ
ジメント—」
天王寺谷達将 岡山大学社会文化科学学域 准教授
- 2月 「ウガンダ農村部における創傷治療活動」
山崎由佳 川崎医科大学形成外科教室 形成外科医師
- 3月 「同位体分析による古代アンデスの生業復元」
瀧上舞 国立科学博物館 研究員

<刊行物・映像作品>

- 学術雑誌「文明動態学」Vol.5
- 映像作品「大学と戦争遺跡 第1回カンファレンス『大学と戦争
遺跡—調査・保存・教育—』」
- 映像作品「岡山大学にのこる戦争遺跡 —軍政の中枢から知と
教育の拠点へ—(岡山大学文明動態学研究所編『大学的岡山
ガイド コラムより』)」
- 映像作品「岡山大学文明動態学研究所紹介」
- 映像作品は岡山大学の映像制作・配信スタジオ「5D Lab.」と
協同制作



学 章

岡山大学 文明動態学研究所

〒700-8530 岡山市北区津島中三丁目1番1号

お問合せ窓口：岡山大学 文明動態学研究所

Tel. 086-251-7442(研究部門)、086-251-7290(文化遺産マネジメント部門)

E-mail ridc@okayama-u.ac.jp

編 集：岡山大学 文明動態学研究所

<https://ridc.okayama-u.ac.jp/>

岡大 文明動態学

検索

